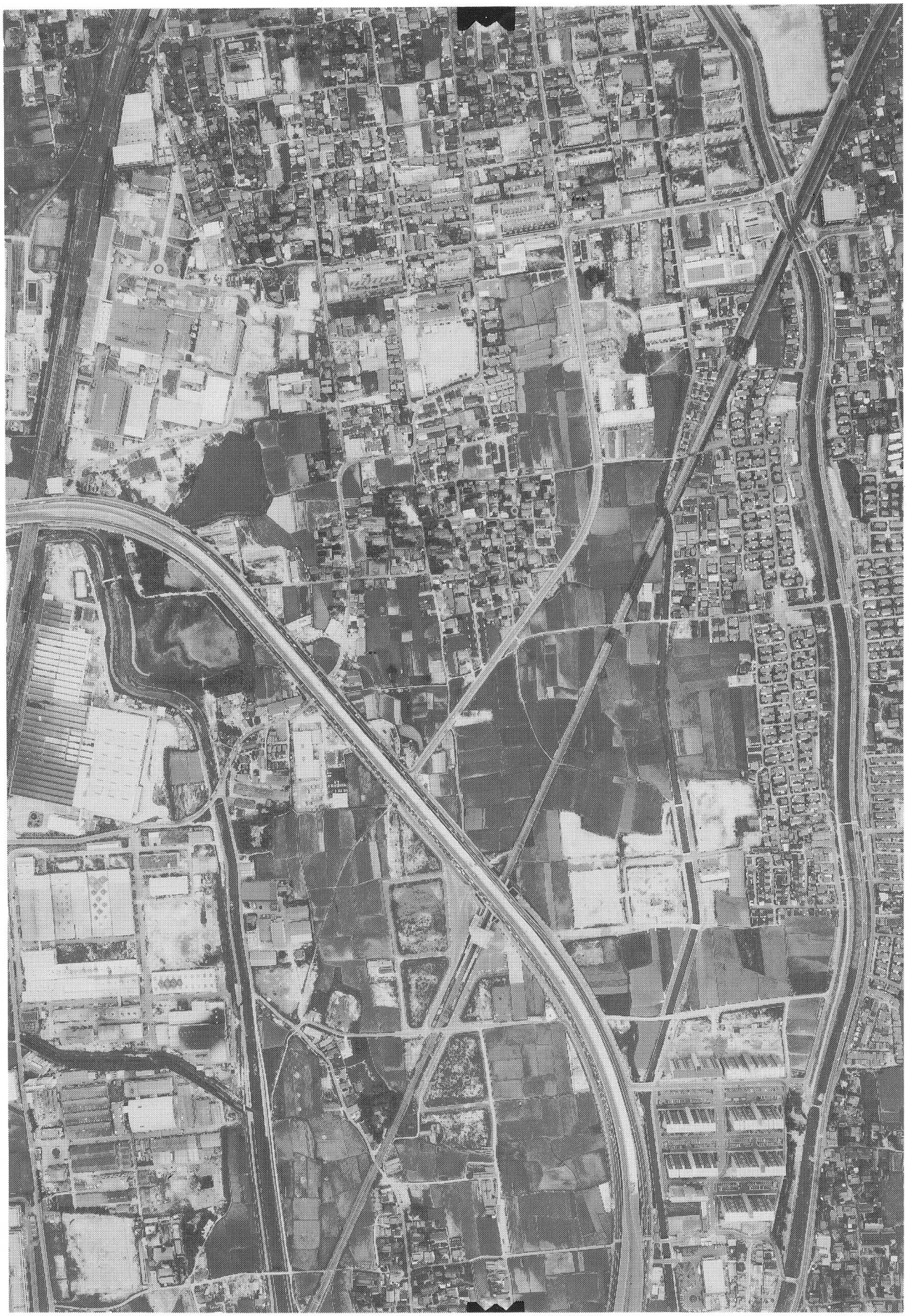
大阪府茨木市

# 平成６年度発掘調査概報

――大阪モノレール工事に伴う発掘調査――

茨木市教育委員会



東奈良遺跡周辺航空写真

（昭和47年5月当時）

# 序　　文

わたしたちのまち茨木は、大阪・京都間に広がる三島平野の中央に位置し、古くから交通の要衝として多くの人々が生活を営み、時代の変遷のなかで、さまざまな郷土の歴史を築いてまいりました。そしていま本市では、北部丘陵地区における国際文化公園都市の整備を進め、現在の市街地と連携した、より住み良い未来都市づくりをめざしているところであります。

こうした本市の環境は、原始・古代の昔から継承されてきたものです。それは、過去に多くの先達が、この地を生活の舞台として、活躍されてきたことで証明されています。

そうした過去の人々が生活したことを教えてくれるのが、今、土に埋もれ眠っている「遺跡」です。

本市には、こういった遺跡が、数千年の間、わたしたちの目に触れることなく、現在でも数多く残されています。

現代に生きるわたしたちは、未来の住み良い都市づくりと環境の保護との調和とともに、過去の貴重な文化遺産を保護・顕彰していくことが、大切な責務となっています。

こうした文化財保護の基本姿勢のもとに、今回報告いたします内容は、大都市大阪の周辺都市を環状に結ぶ、大阪環状モノレール工事に先立って、発掘調査を行いました「東奈良遺跡」の発掘調査についてであります。

あとになりましたが、発掘調査にご協力いただきました関係各位をはじめ、調査に従事された方々に、心から感謝いたしますとともに、今後とも、本市の文化財の保存・保護につきまして、なお一層のご理解・ご協力をお願い申しあげ序文といたします。

平成７年３月30日

茨木市教育委員会
教育長　**村山　和一**

# 例　　言

1．本報告書は、大阪モノレールの第２期事業計画、茨木～（仮称）門真駅間（延長約8.1km）について、茨木市部分にかかる「東奈良遺跡」の発掘調査報告である。

2．発掘調査を実施した範囲は、北のＰ－627から南のＰ－661・2（右）までの35基であるが、橋脚の形が、門形式と深柱形式のものがあり、計40か所で行った。

3．発掘調査にあたっては、茨木市教育委員会社会教育課主査奥井哲秀が、Ｐ－627からＰ－631、Ｐ－647からＰ－661・2（右）までの20基、同主事宮脇　薫が、Ｐ－632からＰ－646までの15基を担当し、同主任佐熊正文、林和博、西井貞善諸氏の協力を受けた。

　また整理作業は、大戸井和江、田中良子、高橋公子、峯松皓代、西坂泰子、森木芳子諸氏の協力を受けた。

4．発掘調査の位置的割り付けは、一つのひとつ調査面積が狭小であるため、これまでの東奈良遺跡の割り付けを利用せず、モノレールの各橋脚番号にしたがった。

5．第２章　調査結果の記述順序は、橋脚番号順としたため、調査日は前後するものもある。

6．発掘調査を実施するにあたっては、大阪府北部特定事業建設事務所モノレール建設事業所（現大阪府モノレール建設事務所）、株式会社淺沼組、前田建設工業株式会社、奥野組、飛島建設・海原建設共同企業体、国土総合建設・ヤマト工業共同企業体の各位に御協力いただいたことに感謝します。

7．本報告書の執筆及び写真撮影は、各担当者が行った。

8．本報告書に使用した地図は、『国土地理院地形図・１／25000』『茨木市都市計画図１／2500』『大阪モノレール平面図１・２・３』である。

また標高は、Ｔ・Ｐ（東京湾標準高）を使用している。

# 本　文　目　次

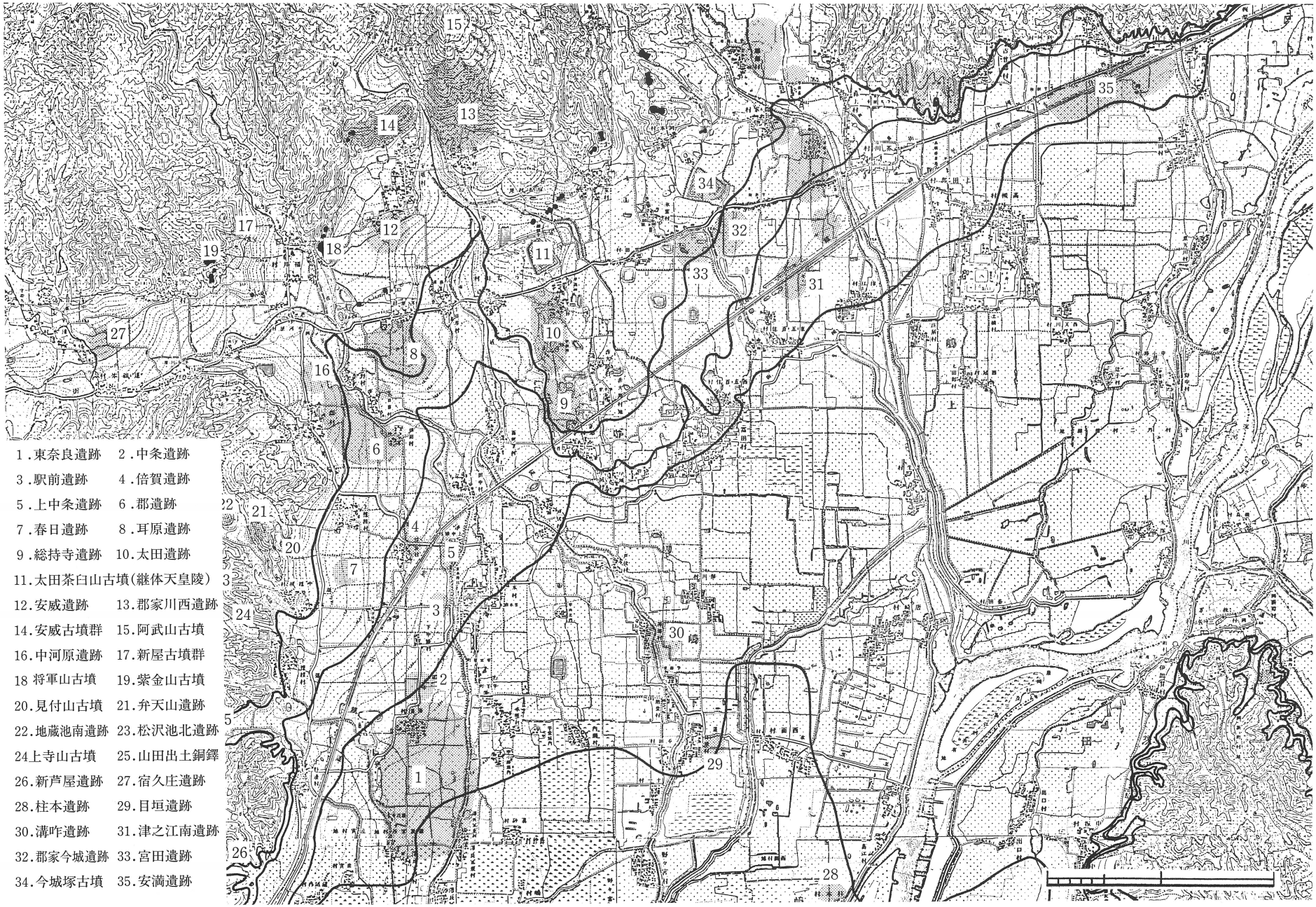
口　　絵　　航空写真
序　　文
例　　言
第１章　調査の経過……1
　　1　位置と環境……1
　　2　周辺の遺跡……1
　　3　調査に至るまでの経過……2
第２章　調査結果……7
　　P－629－A ……7
　　P－630－A ……7
　　P－631－A ……8
　　P－627 ……9
　　P－628 ……9
　　P－629－B ……9
　　P－630－B ……9
　　P－631－B ……9
　　P－632 ……9
　　P－633 ……9
　　P－634 ……9
　　P－635 ……9
　　P－636 ……9
　　P－637 ……10
　　P－638 ……11
　　P－639 ……12
　　P－640 ……13
　　P－641 ……14
　　P－642 ……15
　　P－643 ……16

P－644 ……17
P－645 ……18
P－646 ……18
P－647 ……19
P－648 ……20
P－649 ……21
P－650 ……22
P－651 ……23
P－652 ……24
P－653 ……25
P－654 ……26
P－655－1 ……26
P－655－2 ……26
P－656 ……26
P－657 ……27
P－658 ……27
P－659 ……27
P－660 ……28
P－661・2（右）……28

# 図　目　次

図－1　遺跡分布図
図－2　調査位置図……3
図－3　各調査区位置図……4
図－4　各調査区位置図……5
図－5　各調査区位置図……6
図－6　P－629－A 断面模式図 ……8
図－7　P－630－A 断面模式図 ……8

図－８　Ｐ－631－Ａ 断面模式図 …… ８
図－９　調査周辺写真…… ９
図－10　遺構写真……10
図－11　遺構写真……11
図－12　遺構写真……12
図－13　遺構写真……13
図－14　遺構写真……14
図－15　遺構写真……15
図－16　遺構写真……16
図－17　遺構写真……17
図－18　遺構写真……18
図－19　遺構写真……18
図－20　遺構写真……19
図－21　平面図　溝－１断面図……20
図－22　平面図……20
図－23　遺構写真……20
図－24　上・断面図　下・平面図……21
図－25　遺構写真……21
図－26　上・断面図　下・平面図……22
図－27　遺構写真……22
図－28　上・断面図　下・平面図……23
図－29　遺構写真……23
図－30　上・断面図　下・平面図……24
図－31　遺構写真……24
図－32　上・断面図　下・平面図……25
図－33　Ｐ－657 断面模式図 ……27
図－34　Ｐ－658 断面模式図 ……27
図－35　調査区写真……28



1.東奈良遺跡　2.中条遺跡
3.駅前遺跡　4.倍賀遺跡
5.上中条遺跡　6.郡遺跡
7.春日遺跡　8.耳原遺跡
9.総持寺遺跡　10.太田遺跡
11.太田茶臼山古墳(継体天皇陵)
12.安威遺跡　13.郡家川西遺跡
14.安威古墳群　15.阿武山古墳
16.中河原遺跡　17.新屋古墳群
18 将軍山古墳　19.紫金山古墳
20.見付山古墳　21.弁天山遺跡
22.地蔵池南遺跡　23.松沢池北遺跡
24上寺山古墳　25.山田出土銅鐸
26.新芦屋遺跡　27.宿久庄遺跡
28.柱本遺跡　29.目垣遺跡
30.溝咋遺跡　31.津之江南遺跡
32.郡家今城遺跡　33.宮田遺跡
34.今城塚古墳　35.安満遺跡

図－1　遺跡分布図

# 第１章　調査の経過

## １　位置と環境

茨木市が位置する三島平野は、大阪と京都の中央に位置し、その北部は丹波山地に続く北摂山地が広がり、西部から箕面市南端部にかけては、なだらかな千里丘陵及び箕面丘陵が広がっている。また大河川の淀川が南部を隆々と流れている。

市内を流れる主要河川は、北部の山地部から源を発し、南の平野部へと流れる安威川・佐保川（下流は茨木川となるが、現在は廃川）・西北部から南東部へと流れる勝尾寺川などがあり、これらの河川によって形成された扇状地及び沖積地が広がり、三島平野を形成している。

北部の山地部は、丹波層群と呼ばれる中・古生代の堆積岩や中生代の花崗岩質岩石、丘陵地では、大阪層群と呼ばれる半固結堆積物、平野部では、礫質の半固結堆積物の地質からなっている。

こうした自然的環境に恵まれた茨木市の南部に位置する「東奈良遺跡」は、標高（Ｔ・Ｐ）６メートル前後の低地に立地している。

## ２　周辺の遺跡

茨木市内における最も古い遺物は、今から約１万年以上前の旧石器時代の国府型ナイフ形石器で、太田・安威・郡などの地域から発見されている。このことから１万年以上も前に、この三島の地を舞台に、人々が往来していたことがわかっているが、しかし住居や墓などといった、土に残された跡が見つかっておらず、人々がこの地域に居住していたかどうかについて詳しくはわかっていない。

次の縄文時代も、その遺跡の数は、のちの弥生時代の遺跡数と比較すると非常に少ないが、前期から中期にかけての、爪形文土器の破片や石棒などの遺物のみが、東奈良遺跡から発見されている。

現在のところ茨木市域において、人々が居住したと確認できる最も古い遺跡は、昭和54年に調査された、縄文時代晩期の「耳原遺跡」で、この遺跡からは、甕棺墓（深鉢棺墓）や住居跡などの遺構のほか、遺物も数多く発見されている。また昭和62年、中津町の「牟礼遺跡」において、クヌギ材などの用材を使って自然流路を堰き止めた、人工の施設が発見されている。この堰は、農耕利用のためのものと考えられることから、縄文時代の終り頃には、すでに農耕が始まっていたことを証明する貴重な発見であった。

弥生時代になると、これまで人々が生活するのに不都合であった低湿地にも、土木技術の向上などから、生活空間が広がり、また米作りをすることによって、安定した生活がで

きるようになったため、全国的にも遺跡の数が急激に増え始める。

それは三島平野においても同様であるが、茨木市内に限ると、弥生時代の前期の遺跡は、前代から続く「耳原遺跡」、弥生時代の拠点的集落である「東奈良遺跡」「目垣遺跡」「郡遺跡」であるが、今後の発見の可能性もある。

こうした弥生時代のはじまりは、米作りによる安定した生活、道具の発達による諸技術の向上により、人口の増大、職種による分業化、さらに他地域との交流による社会基盤の変化などによって、東奈良遺跡などの拠点的集落から分村し、その周辺に遺跡が増えていく結果となる。「上中条遺跡」「中条小学校遺跡」「駅前遺跡」「上穂積遺跡」「倍賀遺跡」などがそうである。これらの遺跡は、大集落の周辺に位置し、お互いの利害関係や依存関係を保ちながら、独自の方向へと進んでいくのである。

古墳時代になると、茨木の山地部と平地部の境の丘陵部に、古墳が数多く残されている。

中でも、「紫金山古墳」は、全長106mの前方後円墳で、後円部の中心に竪穴式石室をもつ全国でも有数の前期古墳である。石室内部の副葬品だけでも、銅鏡・鍬形石・車輪石・貝輪・筒形銅製品・短甲・鉄刀・鉄剣・鉄鏃・鉄斧・鉄鎌・鉄鍬など多数の出土品がある。

また「将軍山古墳」も、全長約110mの前期の前方後円墳である。

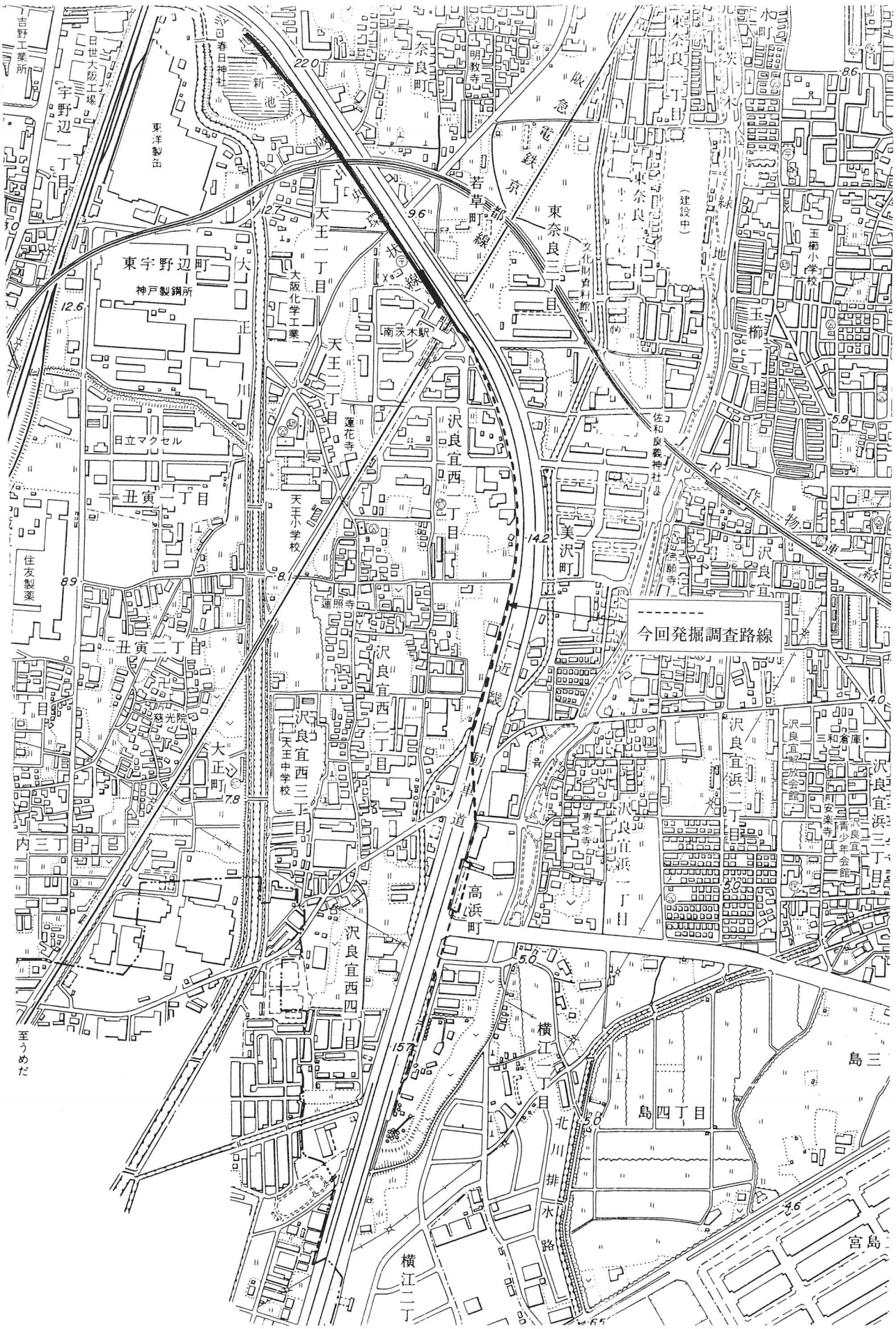
中期の古墳としては、洪積台地上に位置する、全長約226mの前方後円墳である「太田茶臼山古墳（継体天皇陵）」が存在している。

後期以降になると、「安威古墳群」「新屋古墳群」「将軍山古墳群」「長ガ 淵古墳群」などの群集墳のほか、「南塚古墳」「青松塚古墳」「海北塚古墳」「耳原古墳」、さらに終末期になると「初田１号墳」「阿武山古墳」などが見られる。

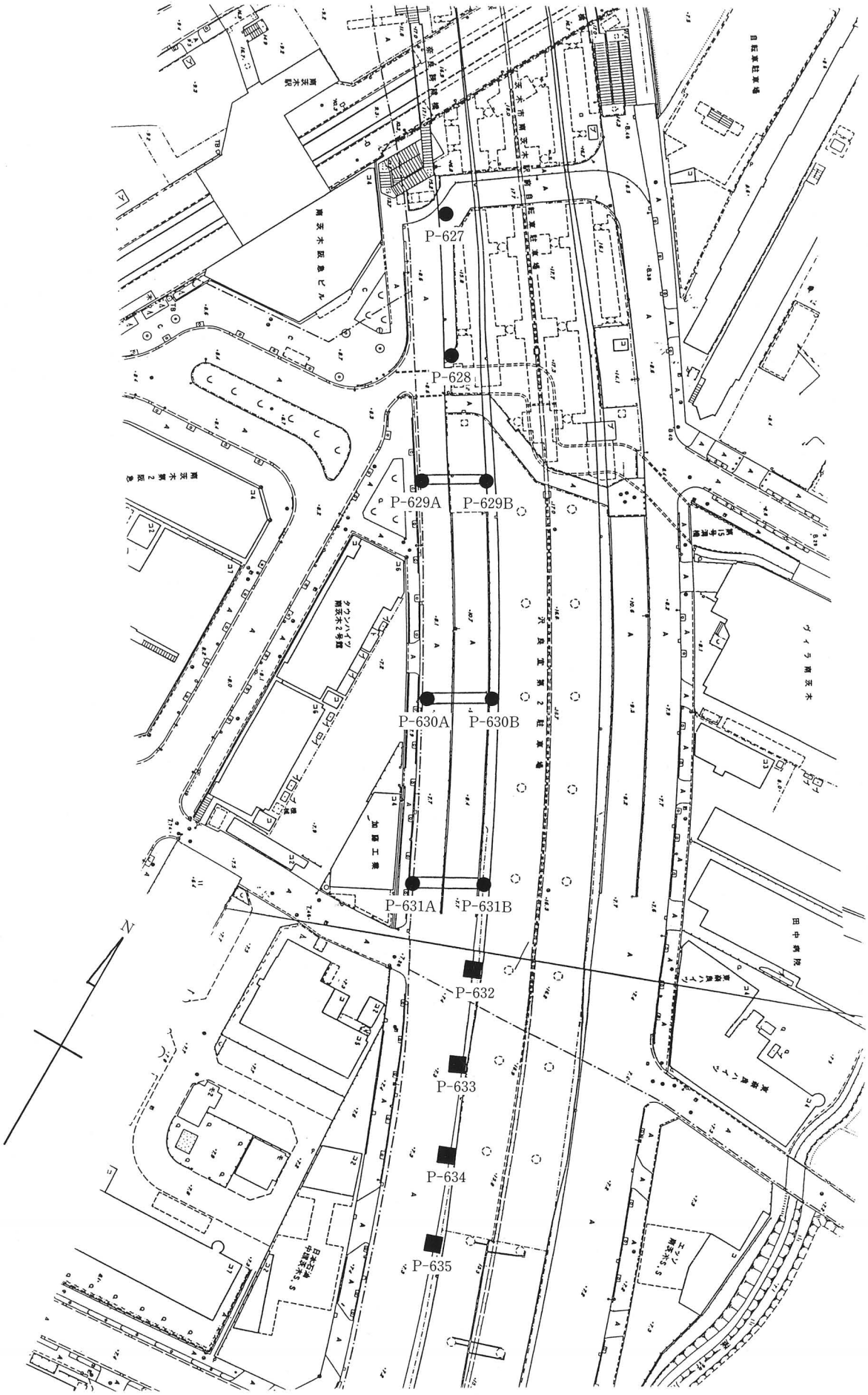
## 3　調査に至るまでの経過

こうした地理的環境、歴史的環境を背景とした今回の発掘調査は、大阪国際空港～門真間を結ぶ、大阪モノレール計画が、弥生時代の拠点的集落である「東奈良遺跡」内を通過する建設計画に伴って行った東奈良遺跡の発掘調査報告であるが、そのうち、千里中央～南茨木間が平成２年６月、柴原～千里中央間が平成６年９月に開業し、今回は、茨木市の南茨木～門真市間の事業着手に伴って、茨木市域にかかる「東奈良遺跡」の発掘調査についての報告書である。

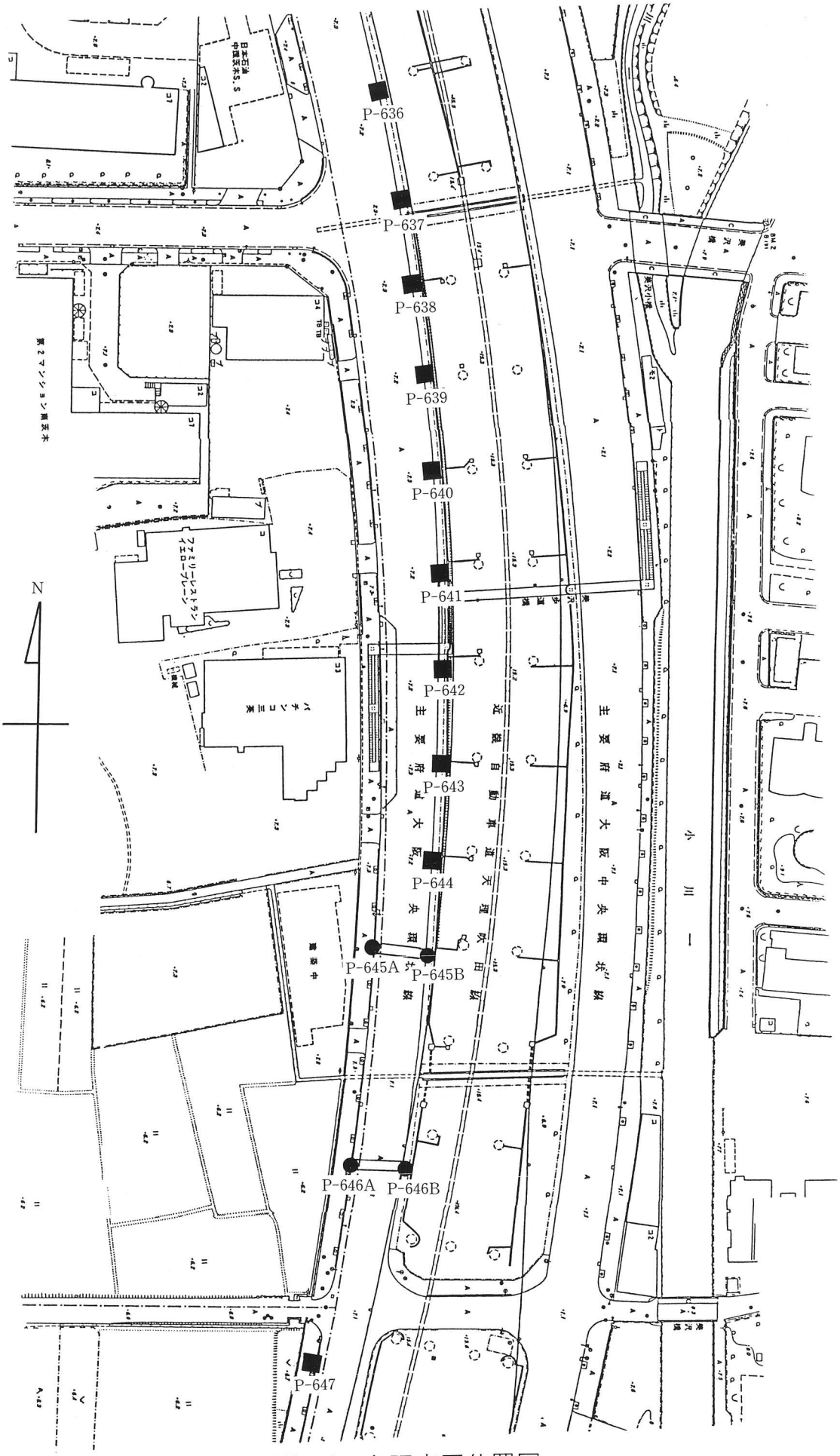
発掘調査に際して、平成２年12月21日、大阪府北部特定事業建設事務所、大阪府教育委員会文化財保護課、茨木市教育委員会社会教育課の三者で、第１回目の協議を行い、その後、数回の協議を重ねた結果、調査の範囲をモノレールの橋脚部分について行うこととしたが、調査の開始は、モノレールと並行して走る中央環状線道路の付け替え工事や、陸橋の移動などから、平成３年度中の早い時期に入る事とした。


今回発掘調査路線
東宇野辺町
神戸製鋼所
日立マクセル
住友製薬
東洋製缶
吉野工業所
日世大阪工場
宇野辺一丁目
丑寅一丁目
丑寅二丁目
大正町
大正川
天王一丁目
天王二丁目
天王小学校
天王中学校
大阪化学工業
南茨木駅
蓮花寺
蓮照寺
慈光院
沢良宜西一丁目
沢良宜西二丁目
沢良宜西三丁目
沢良宜西四丁目
美沢町
高浜町
若草町
東奈良三丁目
東奈良一丁目
文化財資料館
佐和良義神社
徳願寺
専念寺
沢良宜浜一丁目
沢良宜浜二丁目
沢良宜浜三丁目
沢良宜解放会館
三和倉庫
安楽寺
沢良宜青少年会館
玉櫛小学校
玉櫛一丁目
水町
奈良町
明教寺
春日神社
新池
近畿自動車道
京阪電鉄
近鉄奈良線
JR貨物線
横江一丁目
横江二丁
北川排水路
島三丁目
島四丁目
宮島
至うめだ

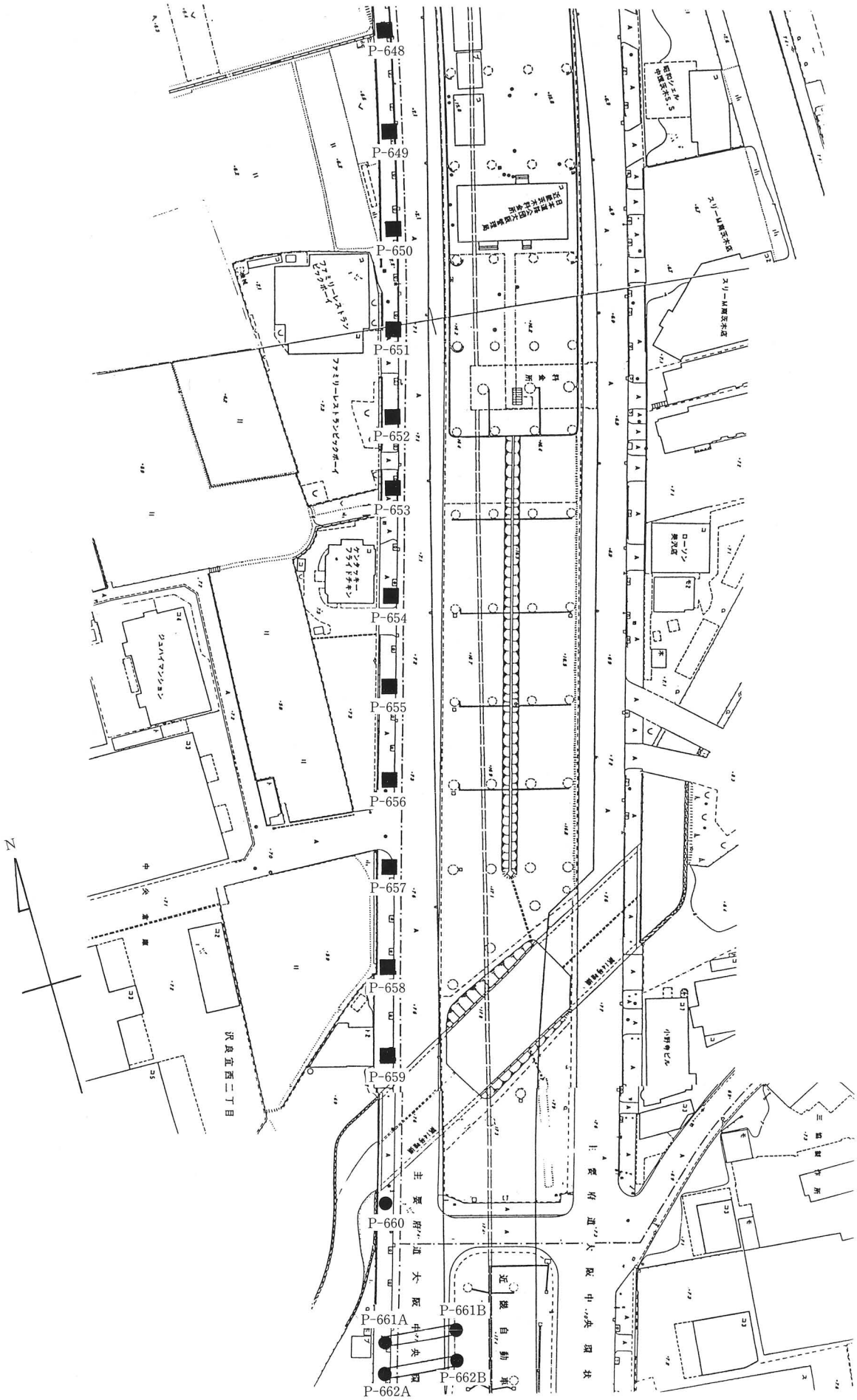
図－2　調査位置図


P-627
P-628
P-629A
P-629B
P-630A
P-630B
P-631A
P-631B
P-632
P-633
P-634
P-635
N

図－3　各調査区位置図


P-636
P-637
P-638
P-639
P-640
P-641
P-642
P-643
P-644
P-645A
P-645B
P-646A
P-646B
P-647
N
日本石油
中部天然ガス
第2マンション東天木
ファミリーレストラン
イエローブレーン
バス
ミニ
東
中部
大阪
中央
田
東
西
目
東
西
主要府道大阪中央環状線
小川一
東大阪線
東大阪小橋

図－4　各調査区位置図


P-648
P-649
P-650
P-651
P-652
P-653
P-654
P-655
P-656
P-657
P-658
P-659
P-660
P-661A
P-661B
P-662A
P-662B
N
沢良宜西二丁目
主要府道大阪中央環状
近畿自動車

図－5　各調査区位置図

# 第２章　調査結果

「東奈良遺跡」は、茨木市の南部の奈良町・若草町・天王一丁目～二丁目・沢良宜西一丁目～四丁目・東奈良一丁目～三丁目・美沢町などの地域に存在している。

この地域を通る交通網は、近畿高速自動車道・大阪中央環状線などの道路がほぼ南北に、また東西に阪急電車が走っている。

今回の大阪モノレール工事は、前記の道路網に沿って、阪急南茨木駅から南に向かって延長されるため、発掘調査区域も、遺跡のほぼ中央から南の部分にあたるところである。

調査は、阪急南茨木駅から南に向かって順に行うこととしたが、日程の都合上、橋脚番号順には調査できなかった調査区もある。

各調査区番号は、例言で記述したとおり、調査面積が狭いため、従来からの東奈良遺跡の地区割りは使用しなかった。したがって、調査区番号は、モノレール工事の橋脚番号と同じ番号とした。(図－３・４・５)

調査方法は、橋脚の構造や安全対策上、円形ライナーの調査区と矢板打ちの調査区があり、また現在の生活道路の確保の問題、従来の調査結果などから、立会調査のみの調査区と発掘調査の調査区がある。

以下、橋脚番号順に、調査結果を記述する。

## Ｐ－629－Ａ

平成３年11月13日から調査を行った。Ｐ－630－Ａと同様に地層が軟弱なため、工事用ライナーを入れながらの調査である。(図－６)

各地層の基本的層序は、Ｐ－630－Ａと変化はないが、青灰色粘質土層の生活面の高さは、Ｔ・Ｐ 3.889m で、約１ｍも低くなっている。このことは、青灰色粘質土層の上層に白濁色砂層が堆積しているためで、谷状の中でも少し窪んだ位置と考えられる。遺物の出土はなかった。

## Ｐ－630－Ａ

平成３年９月14日から調査を行った。地層が軟弱なため、工事用ライナーを入れながらの調査であるので、立会調査と断面調査を行った。(図－７)

地層断面は、現道路面下、－1.15mまで盛土で、その下層の若干の旧耕土と、約0.4mの

厚さの黄濁色土層、さらにかすかな明茶色粘土層を挿んで、黄褐色土層が続く。その下層に、約0.4mの厚みをもつ黒色粘土層が堆積していた。この層が遺物包含層と考えられるが、遺物の出土はなかった。その下層には、東奈良遺跡の生活面である青灰色粘質土層が見られた。

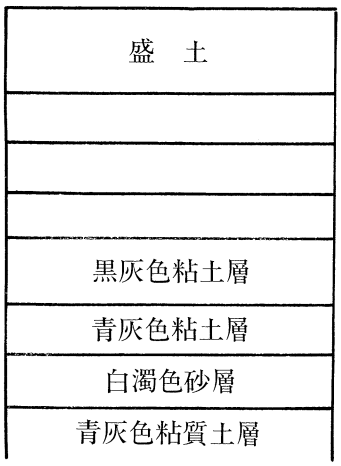
この生活面の高さは、T・P　4.918mで、遺跡の中でも低く、谷状の部分であろうと考えられる。従来の調査結果からも、この辺りは谷状の地形の場所である。

## P－631－A

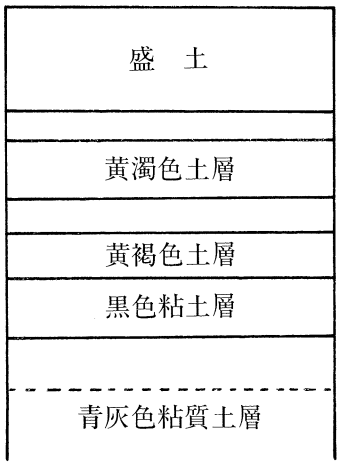
平成3年12月7日から調査を行った。道路面下、－1.75m のT・P 5.524m で暗青灰色の粘質土層が検出された。この上層に、暗濁色粘土層が約0.05m の厚さで堆積している。この層は、過去の近隣の調査から第1包含層と考えられるが、遺物の出土はなかった。

その下層は、濁色砂層が約0.3mの厚さで堆積し、以下黒色の粘土層が続いている。この黒色粘土層が第2包含層で、弥生土器（畿内第Ⅳ様式）の壺片が出土した。

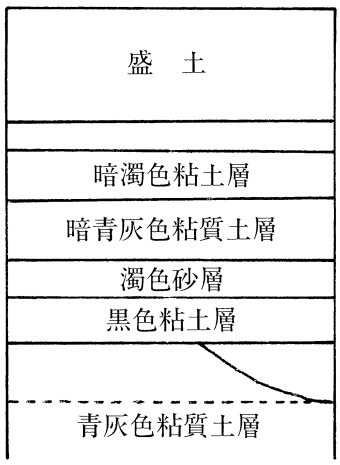
このグリッドの生活面の高さは、T・P 4.474mで、西から東へと傾斜している。これは谷状の傾斜面と考えられる場所である。




図－6
P-629-A 断面模式図




図－7
P-630-A 断面模式図




図－8
P-631-A 断面模式図

Ｐ－627・628・629－Ｂ

Ｐ－630－Ｂ・631－Ｂ

上記の各調査区は、過去の近隣の調査結果などから立会調査のみを行った。

629－Ｂ・630－Ｂ・631－Ｂの調査区は、弥生時代の地形では谷状にあたるところで、灰濁色粘土層が厚く堆積し、遺物の出土はなかった。

627・628の調査区についても同様で、遺物の出土はなかった。

Ｐ－632・Ｐ－633・Ｐ－634

Ｐ－635・Ｐ－636

Ｐ－632・Ｐ－636の調査は、平成４年４月４日から５月17日にかけて工事の進捗にあわせて行った。

いずれの調査区も、近畿高速自動車道と大阪中央環状線、阪急電車京都線を越えるための越線橋の工事のため、現道路面下、約－６ｍ掘削された後、埋め戻されていた。そのため、遺物・遺構及び包含層は検出されなかった。

現道路下、約－10ｍまで、立会調査を行った。地層の観察によると、暗灰色粘質土層及び砂層の互層の堆積が認められた。

暗灰色粘質土層には、葦と考えられる植物が含まれていた。そのことから、洪水などの沖積作用によって土砂が堆積していく中で、また堆積作用のないときにおいては、葦原を形成していたことが考えられる。

図－９　調査周辺写真（北から）

## Ｐ－637

平成４年５月24日から調査を行った。調査面積は東西６．５ｍ×南北８．５ｍの55㎡である。

重機による第１次掘削を、現道路面下、－1.63ｍまで行った結果、茶褐色土層の遺物包含層が約0.15ｍの厚さで確認された。この層中から、須恵器・土師器及び弥生土器などが出土した。いずれの遺物も細片であった。この層の下層に、無遺物の暗灰色土層が、約0.27～0.42ｍ堆積していた。

暗灰色土層の下層に、生活面と考えられる青灰色粘質土層が堆積しているが、この層は、調査区の北東から東南に下がっていく状態で検出された。このことから、この傾斜はＰ－629・Ｐ－631で確認されている谷状の部分であると考えられる。

遺構は検出されなかった。

図―10　遺構写真（北から）

P－638

平成４年６月４日から調査を行った。調査面積は東西5.3m×8.8mの46m²である。

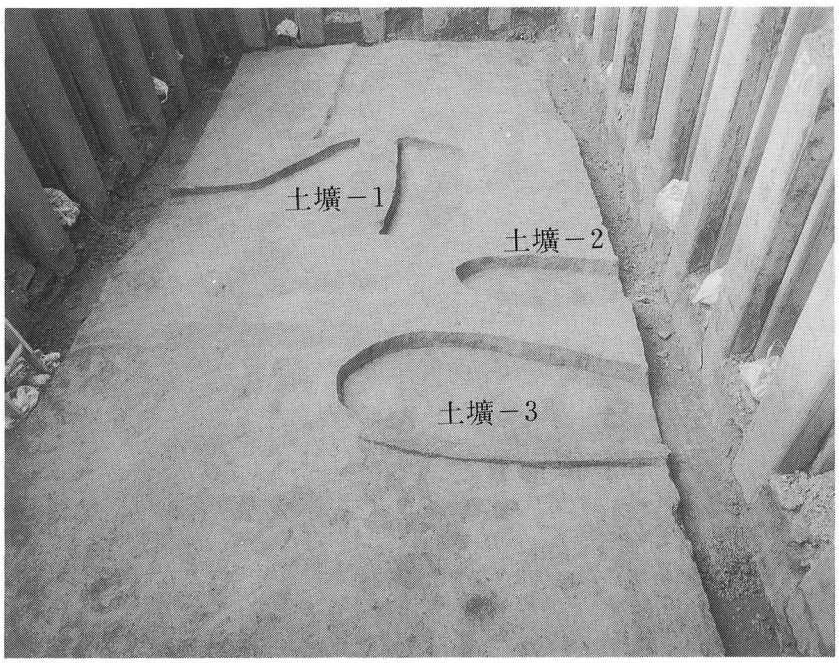
重機による第一次掘削を現道路面下、－1.71mまで行った結果、茶褐色土層の遺物包含層が約0.25mの厚さで確認された。この層中から、弥生土器、土師器、須恵器片などが出土した。さらにその下層に、暗褐色土層が約0.15mの厚さで堆積しており、この層からは弥生土器のみが出土した。遺物の出土量は、コンテナバットに１箱分の出土であった。

その下層に、生活面である青灰色粘質土層が検出され、遺構としては、ほぼ東西に長軸をもつ楕円形の土壙２基と、不定形の土壙１基が検出された。

土壙－１は、東西の長軸が1.6m以上、短軸が0.48m、深さが0.07mの楕円形をした土壙である。遺物の出土はなかった。

土壙－２は、土壙－１と同じく、ほぼ東西に長軸が1.1m以上、短軸0.36m、深さ0.05mの楕円形した土廣である。遺物の出土はなかった。

土壙－３は、調査区の西でほぼ円形に広がり、東ですぼみ、溝状になった状態で検出された。南北の広いところで、0.75mあり、狭いところで0.32m、東西に3.7m以上、深さ0.08mの不定形をした土壙である。調査区の関係で、全体の形態を知ることができなかった。遺物の出土はなかった。




図―11　遺構写真（北から）

P－639

平成４年６月14日から調査を行った。調査面積は東西6.8m×南北8.8mの59m²である。

重機による第１次掘削を、現道路面下、－1.85mまで行った結果、茶褐色土層の遺物包含層が0.25mの厚さで確認された。この層中から、弥生土器、土師器、須恵器が出土した。さらにその下層に、暗褐色土層が0.30mの厚さで堆積しており、この層からは弥生土器片が出土した。

その下層に、生活面と考えられる青灰色粘質土層が、調査区の北約2.5mの範囲で検出された。その南側部分では、暗灰色砂層が検出された。この暗灰色砂層から、弥生時代中期（畿内第Ⅲ・Ⅳ様式）の弥生土器が、コンテナバットに８箱分出土した。また、柱状片刃石斧、剥片などの石器が出土している。

調査場所の関係で、検出面を狭くしながらも、なお危険と考えられるので、この暗灰色砂層の堆積が、約2.7m以上の厚さで堆積していることを確認して調査を終った。

図－12　遺構写真（北から）

## P－640

平成４年６月15日から調査を行った。調査面積は、東西4.2m×南北8.8mの約37㎡である。

重機による第１次掘削を、現道路面下、－1.75mまで行った結果、茶褐色土層の遺物包含層が0.35mの厚さで堆積していた。この層中から弥生土器、土師器、須恵器片が出土した。その下層に0.15～0.2mの無遺物の茶黄色砂層が堆積している。さらにその下層に、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器片を含む褐色土層が堆積している。

その下層が、青灰色粘質土層の生活面となる。

遺構としては、柱穴が20数穴検出された。ほとんどの柱穴は、直径0.2～0.3mの大きさであるが、柱穴－１のように直径0.44mの大きさのものもある。深さも、浅いものもあるが、0.3mの深さをもつものもある。ほとんどの柱穴からの遺物の出土はないが、一部の柱穴から瓦器片が出土している。建物跡としては確認することはできないが、平安時代の終りから中世にかけての建物の存在が考えられる。

図―13　遺構写真(北から)

## P－641

平成４年６月20日から調査を行った。調査面積は、東西4.5m×南北5.6mの約29m²である。

重機による第１次掘削を、現道路面下、－2.5mまで行った。耕土、包含層の堆積が認められなかったので、生活面と考えられる青灰色粘質土層まで掘削を行った。

遺構としては、調査区の関係から一部の検出であるが、ほぼ円形で、直径1.85m前後、深さ0.64mの土壙が６基検出された。いずれの土壙内も堆積が灰色土層で、一気に埋めた状態であった。遺物の出土はなかった。このことからこの土壙は、近世以後の新しい土採り跡とも考えられる。

図―14　遺構写真（南から）

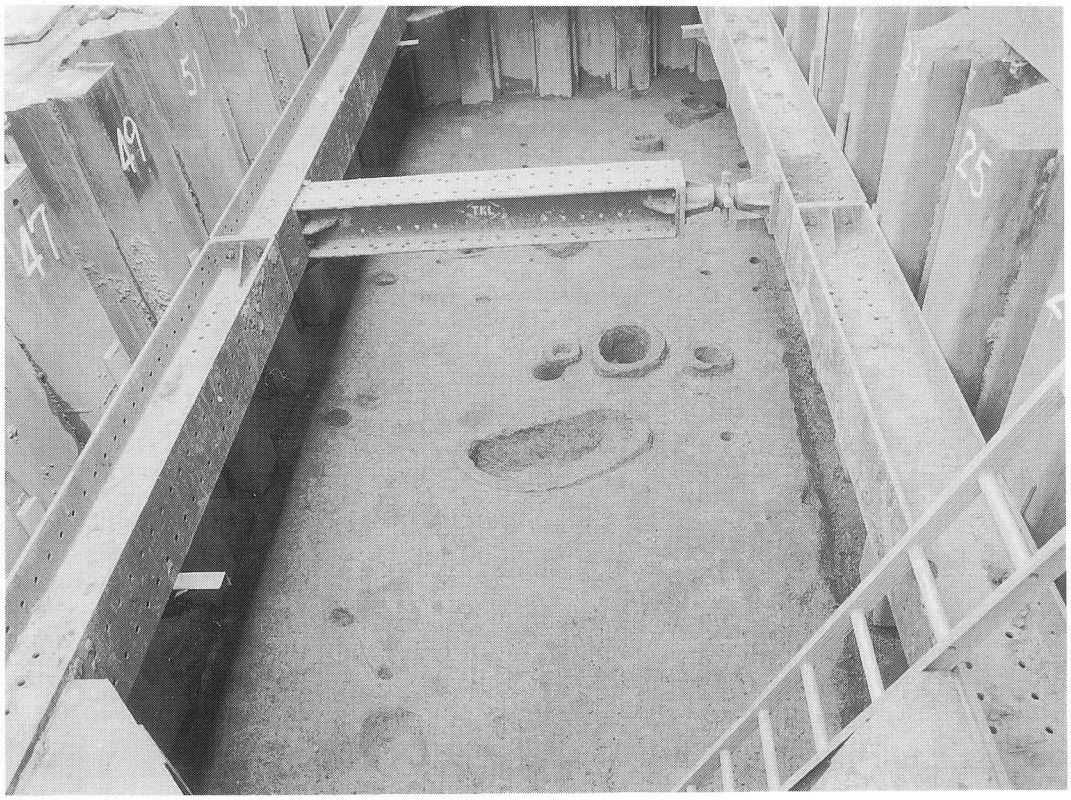
P－642

平成４年６月23日から調査を行った。調査面積は、東西4.5m×南北6.7mの約30m²である。

重機による第１次掘削を現道路面下、－1.55mまで行った結果；茶褐色土層の遺物包含層が、約0.3mの厚さで確認された。この層中から、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土している。さらにその下層に、褐色土層が、0.15mの厚さで堆積していたが、この層中からも弥生土器、土師器、須恵器、瓦器が出土している。

この下層に、黄褐色砂質土層が、約0.1～0.2m堆積しており、それを生活面として、柱穴が20数穴検出された。柱穴は、直径0.2～0.35mの円形の小さい柱穴である。
そのうち５穴から瓦器椀片、土師皿片が出土している。調査区が狭いこともあり、建物としては確認することができなかった。時期としては、平安時代後期から中世の時代であると考えられる。

黄褐色砂質土の下層に、生活面である青灰色粘質土層が堆積している。遺構は検出することができなかった。



図―15　遺構写真(北から)

P－643

平成４年７月５日から調査を行った。調査面積は、東西4.5m×南北6.5mの約29m²である。

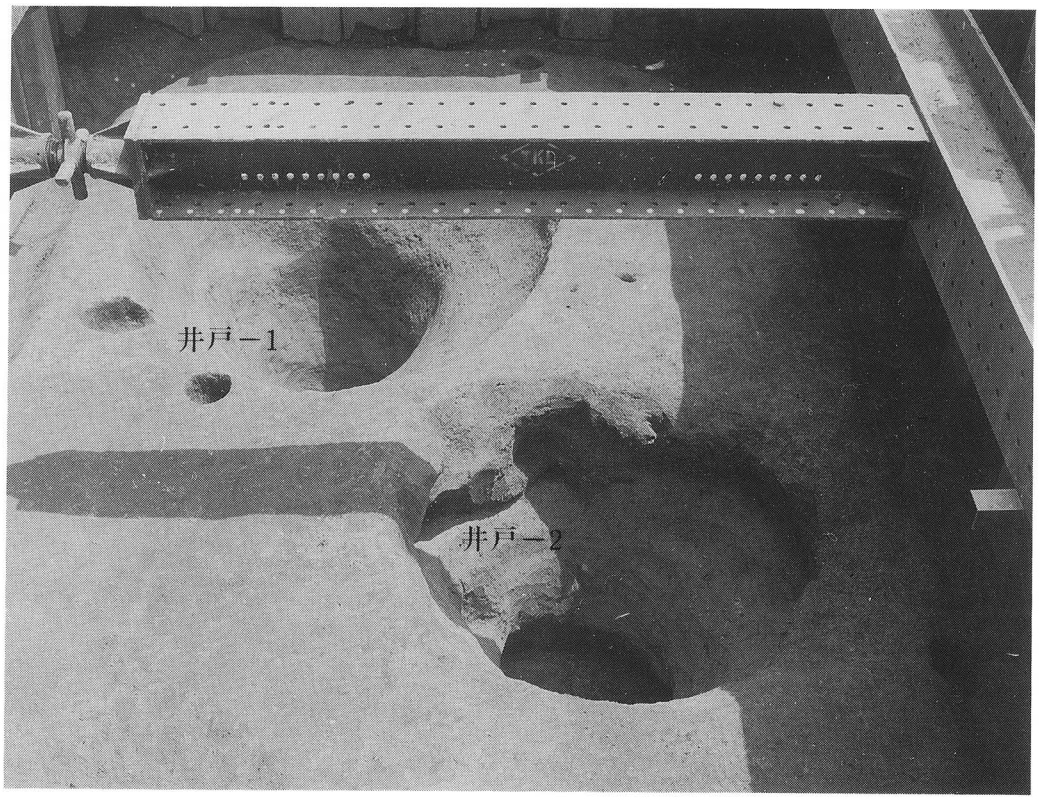
重機による第一次掘削を、現道路面下、－1.6mまで行った結果、褐色土層の遺物包含層が、0.30mの厚さで確認された。この層中からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器片などが出土した。

この層の下層が、青灰色粘質土層の生活面である。

遺構としては、井戸２基と柱穴が２穴検出された。井戸２基は、近接した状態で検出されている。

井戸－１の規模は、直径が1.8m、深さ1.4mである。検出面から下へ、約0.25mのところで段が設けられ、直径が1.2mに狭まっている。出土遺物は、鎌倉時代の瓦器椀の破片と土師皿が出土している。

井戸－２は、井戸－１の北西に隣接した状態で検出した。規模は、直径1.35m、深さ1.6mである。出土遺物は、鎌倉時代の瓦器椀の破片と、土師皿の破片が出土している。柱穴は、井戸－１の西南に近接したところで検出された。直径が0.23m、0.35mの小さい柱穴である。出土遺物はなかった。




図－16　遺構写真（北から）

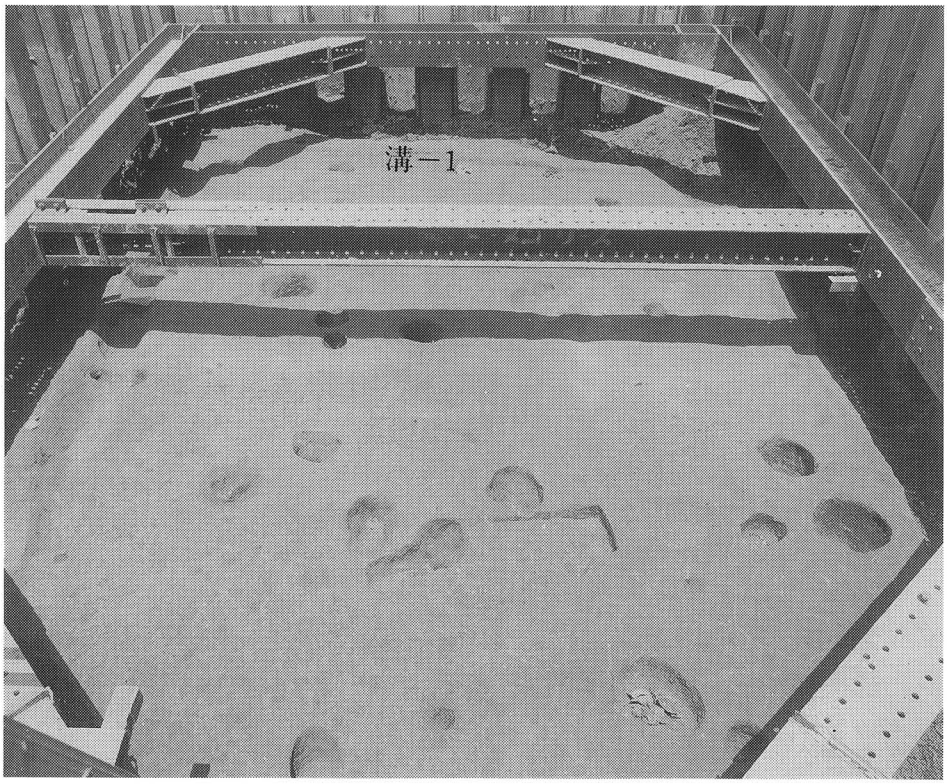
P－644

平成４年７月10日から調査を行った。調査面積は、東西5.5m×南北7.5mの約41㎡である。

重機による第１次掘削を、現道路面下、－1.7mまで行った結果、褐色土層の遺物包含層が約0.25mの厚さで確認された。この層中からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器などが出土した。

この層の下層が生活面となるが、一部生活面の上に、わずか数cmの灰濁色砂層が堆積している。

遺構としては、溝－１は、調査区の南の部分に、西北から東南方向に流れをもつ、幅約0.36m、深さ0.14mのものであり、調査区の西で途切れた状態で検出された。溝内の堆積土の暗茶褐色土から、少量の瓦器椀、土師皿の細片が出土している。時期は、平安から鎌倉時代の溝と考えられる。また、直径0.25～0.35mの円形の柱穴が、30数穴検出された。このうち９穴の柱穴から、瓦器、土師皿の細片が出土している。このことから、柱穴の時期は平安から鎌倉時代である。しかし調査の範囲が狭いこともあり建物として確認することはできなかった。




図―17　遺構写真(北から)

## Ｐ－645・Ｐ－646

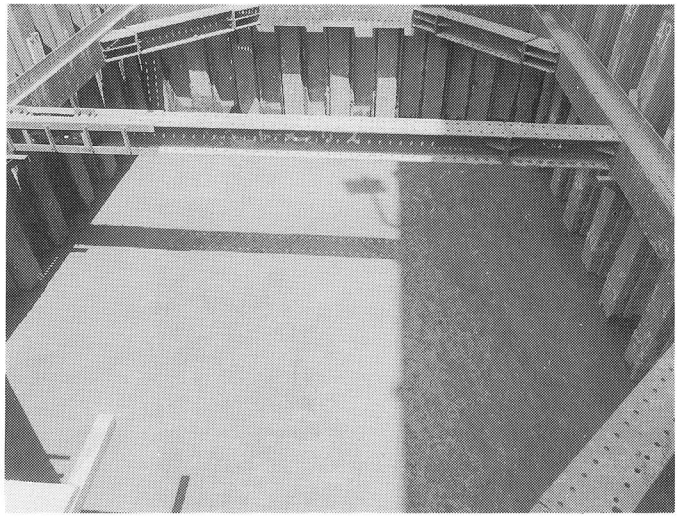
Ｐ－645およびＰ－646の調査区は、大阪中央環状線の道路部分及び歩道部分に設定された調査区であり、交通などに支障が生じることから、工事用ライナーを入れながらの調査であるので、立会調査と断面調査を行った。

調査は、平成４年９月２日から10月10日にわたって行った。

いずれの調査区においても、道路建設に伴い、現道路面下、－3.7m近くまで掘削されたのち埋めもどされていた。

しかし、一部においては、現道路面下、－2.35mで旧耕土を確認することができた。

耕土が、0.25m、床土0.32m、無遺物層である黄濁色砂質土層が0.17m堆積しており、その下層に、厚さ0.31mの茶褐色土層の遺物包含層が堆積している。包含層から瓦器及び土師器の細片が出土した。その下層には、生活面と考えられる黄色土層が堆積していたが、遺構は検出されなかった。黄色土層の上面の高さは、Ｔ・Ｐ 5.28mであった。



図―18　遺構写真

図―19　遺構写真

P－647

この調査区から施行業者が、飛島建設・海原建設共同企業体に変わる。

平成６年２月７日から調査を行った。調査面積は、東西5m×南北7mの35m²である。

重機による第一次掘削を、現道路面下、－1.55mまで行った結果、茶褐色土層の遺物包含層が約0.3mの厚さで確認された。この層中から、弥生土器片、土師器の椀、須恵器の坏などが出土した。さらにその下層に、茶褐色粘質土層が約0.2mの厚さで堆積していたが、この層中からも、弥生土器片、須恵器片、土師器の皿、瓦器片など各時期の遺物が出土している。

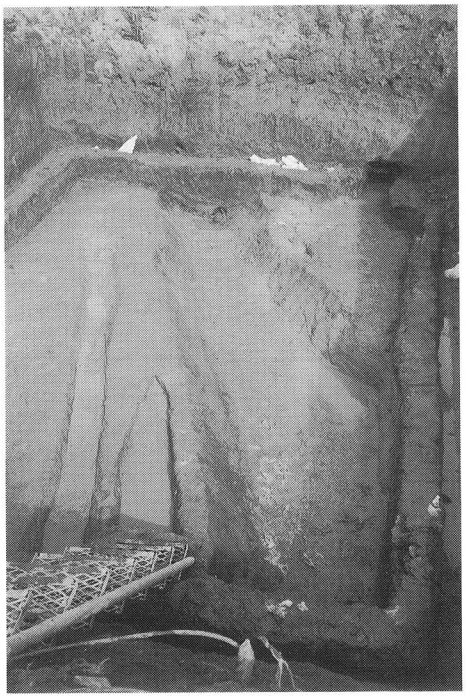
とくに調査区の北東の角で出土した須恵器は、坏身のほぼ完形品で、６世紀後半の時期の判明するものであった。遺物の出土量は、コンテナバットに２箱分であった。

この層の下層が、青灰色粘質土層の生活面となるが、一部生活面の上に、灰濁色砂層が堆積している。

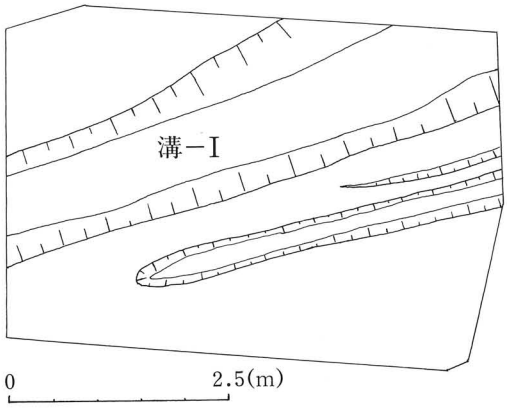
遺構としては、ほぼ南北方向に走る、幅約1.2m、深さ約0.5mの溝１条（溝－１）が検出された。この溝の内部の堆積土は、上層から、灰濁色層、黒色粘土層、白濁色砂層、黒色粘質土層の４層がレンズ状に堆積し、上層では弥生土器・須恵器などの遺物を含んでいるが、下層からは、弥生時代中期の土器片のみが出土していることから、この溝の築造は、弥生時代中期であったと考えられる。

溝－１の東側に、細くて浅い溝が２条（溝－２・２）検出された。いずれも溝－１と同方向に走っているが、これは上層から掘られていた溝の最下部が、一部残されたものと考えられる。溝－２・２からは、土師器の細片が出土しているが、時期は不詳である。

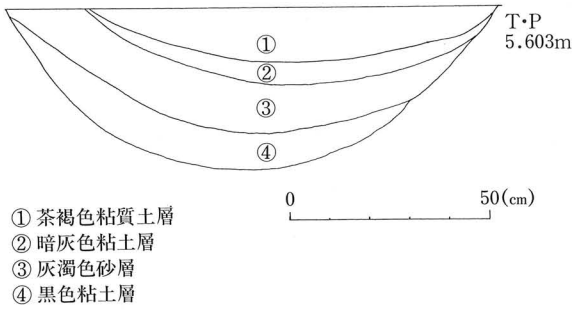
地山面は、黄濁色砂質土層で、高さはＴ・Ｐ 4.889mである。



図－20　遺構写真




図－21　平面図




溝－I　断面図

## P－648

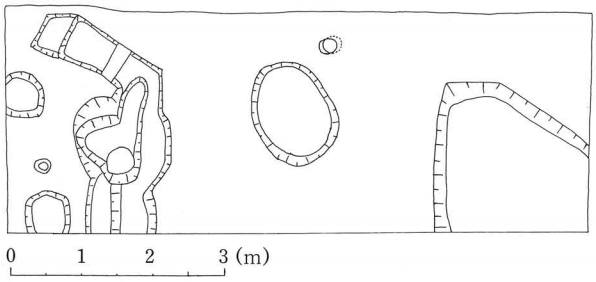
平成６年４月26日から調査を行った。今回のモノレール建設工事に伴う調査としては、最後に調査を行った調査区である。調査面積は、東西3m×南北8mの24m²である。

この調査区は、現道路面から地山上面まで攪乱されていたため、重機によって一気に地山面まで掘削した。

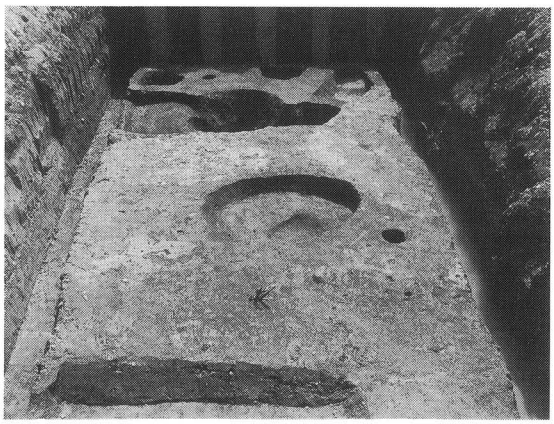
遺構としては、円形の柱穴２、不定形の柱穴２、円形土壙１基、落ち込み１基、溝状遺構などが検出されたが、遺物の出土はなく、時期は不詳である。

尚、攪乱を受けた中間層には、新しい井戸と杭列のあとが検出されている。

地山面は、黄濁色砂質土層で、高さはＴ・Ｐ 5.004mである。




図－22　平面図



図－23　遺構写真

## P－649

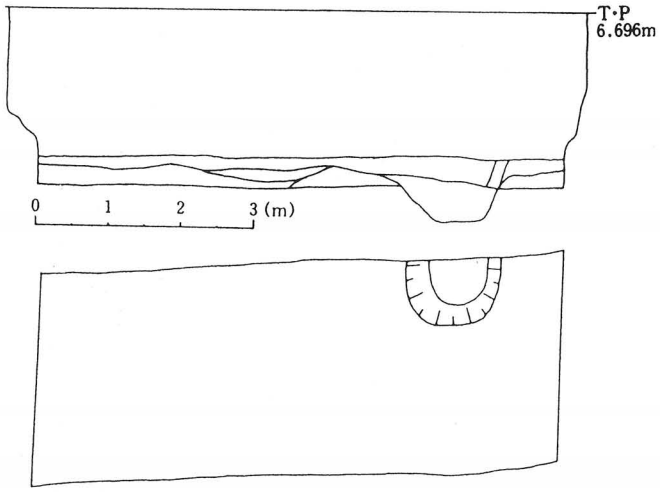
平成６年３月７日から調査を行った。調査面積は、東西3m×南北7mの21㎡である。

この調査区は、現道路面から、－2.0mまで攪乱されており、地山上面の遺物包含層も、ブロック状に残っているのみである。

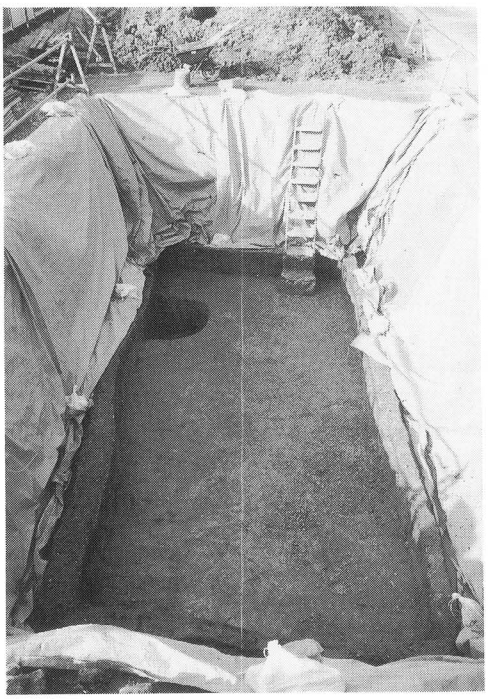
遺物は、ブロック状に残った茶褐色土層や黒灰色粘土層などから、弥生土器、須恵器の小片が出土している。

遺構は調査区の西側で、幅1.3m、確認長0.8mの楕円形土壙１基が検出された。内部には、暗灰色砂質粘土層が堆積していたが、遺物の出土はなく、時期は不詳である。

地山面は、黄褐色土層で、高さはＴ・Ｐ 4.670mである。




図－24　上・断面図　　下・平面図



図－25　遺構写真

## Ｐ－650

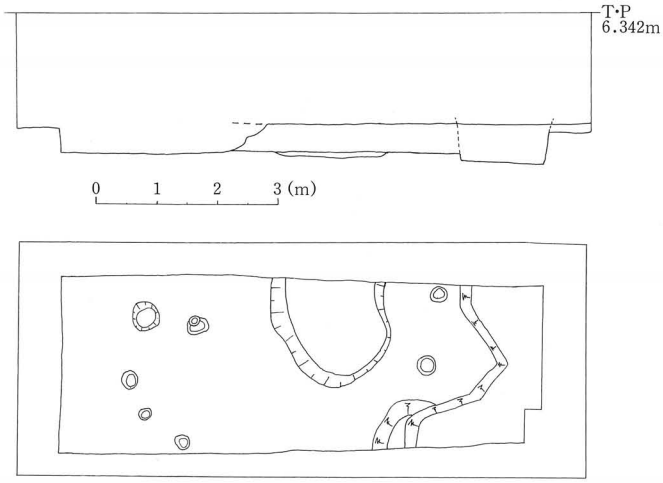
平成６年３月11日から調査を行った。調査面積は、東西4m×南北9mの36m²である。

この調査区は、Ｐ－649と同様に現道路面から、－2.0mまで攪乱されていたが、茶褐色粘質土層の遺物包含層は、約0.2mの厚さで、比較的安定した状態で検出された。

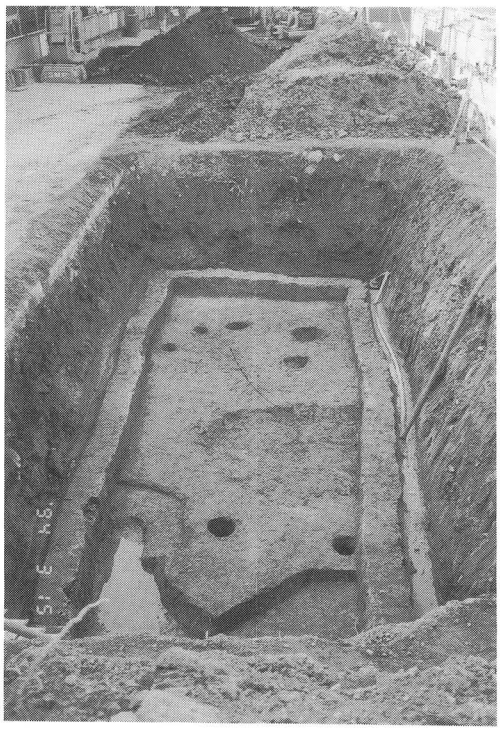
包含層から出土した遺物は、弥生土器、須恵器、土師皿などの小片である。

遺構は、調査区のほぼ中央で、幅2.0m、現存長2.0m、深さ0.1mの楕円形の落ち込みが検出された。内部には、青灰色粘土層が堆積しており、この層中に、６世紀後半の須恵器片が出土していることから、この落ち込みの築造時期は、古墳時代の後期と考えられる。さらに円形の柱穴が７穴検出されたが、遺物の出土はなかった。

地山面は、黄褐色土層で、高さはＴ・Ｐ 4.692mである。




図－26　上・断面図　　下・平面図



図－27　遺構写真

## Ｐ－65Ⅰ

平成６年３月23日から調査を行った。調査面積は、東西2m×南北9mの18㎡である。

調査予定面積のうち、西側の部分は第一次掘削の結果、すでに攪乱を受けていたため、東西は、2m幅の調査となった。

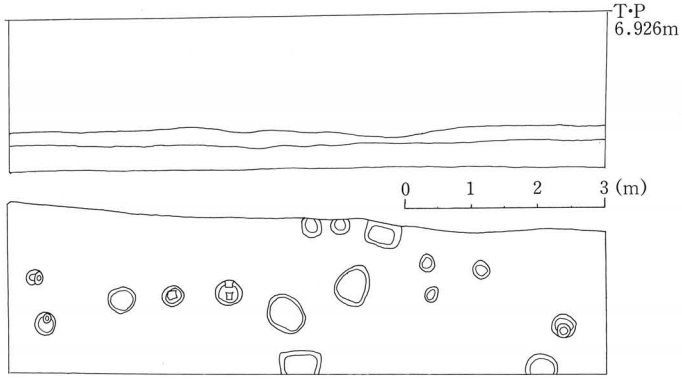
この調査区も同様に、現道路面から、－1.6mまで攪乱されていた。その下層に黄濁色粘土層、さらに茶褐色粘土層の鉄分を含む遺物包含層が、約0.4mの厚さで検出された。

包含層から出土した遺物は、弥生土器、須恵器、瓦器などの小片である。

遺構としては、柱穴が10数穴検出された。これらのピット群は、浅いものもあるが、0.3mの深さをもつものもあり、比較的しっかりとしたものである。

とくにピット６、ピット７からは、中世（１４ｃ頃）の丸瓦片が出土している。しかし調査面積が狭小であるため、各柱穴のまとまりは判定しがたいが、中世の頃に、何らかの建物があった可能性が認められるものである。

地山面は、青灰色土層で、高さはＴ・Ｐ 4.798mである。




図－28　上・断面図　　下・平面図

図－29　遺構写真

## Ｐ－652

平成６年３月29日から調査を行った。調査面積は、東西2.4m×南北9mの21.6m²である。

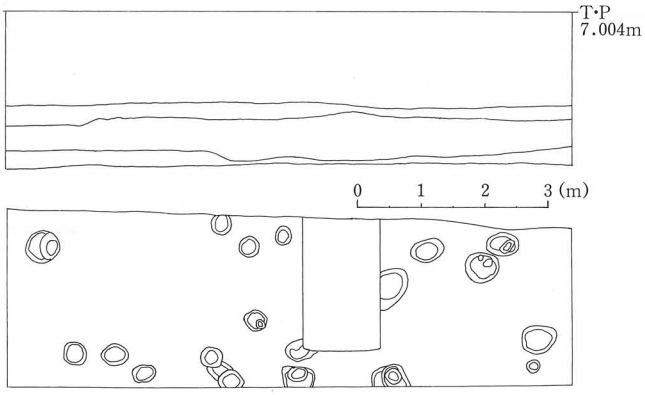
調査予定面積のうち、西側の部分は第一次掘削の結果、すでに攪乱を受けていたため、東西は、2m幅の調査となった。

この調査区も、同様に現道路面から、－1.5mまで攪乱されていた。その下層には、Ｐ－651には見られなかった無遺物層の灰濁色粘土層が、約0.15m の厚さで堆積していた。さらに、黄濁色砂層が0.5mの厚さで堆積していた。この層は、下にいくほど荒い砂が堆積しており、洪水などの影響が考えられるものである。最下層の茶褐色粘土層の遺物包含層は、上層の砂層によって削られ、部分的に薄くなっているが、平均約0.15m の厚さで検出された。包含層から出土した遺物は、６ｃ後半頃の須恵器片が２、３点出土したのみであった。

遺構としては、柱穴が20数穴検出された。これらのピット群は、北側のＰ－651のピット群と関連性のあるものと考えられる。

この調査区で試掘坑を設けて、生活面よりさらに下層の遺跡の残存状況を調査したが、暗灰色粘土の沖積層が続くのみであった。

地山面は、青灰色土層で、高さはＴ・Ｐ 4.622mである。




図－30　上・断面図　　下・平面図

図－31　遺構写真

## Ｐ－653

Ｐ－651と並行して調査を行った。調査面積は、東西2m×南北9mの18㎡である。

調査予定面積のうち、西側の部分は第一次掘削の結果、すでに攪乱を受けていたため、東西は、2m幅の調査となった。

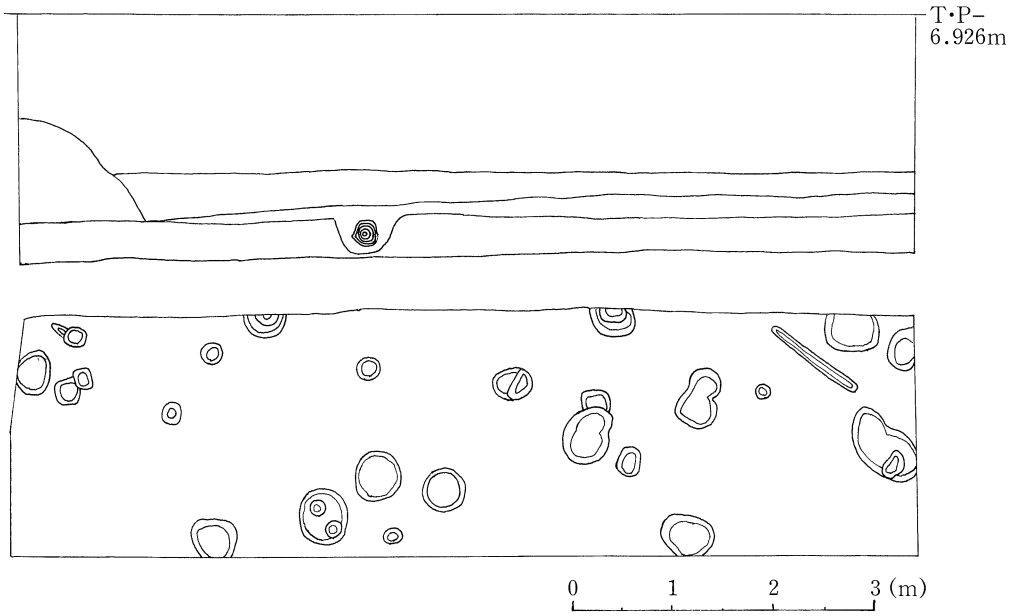
この調査区も、同様に現道路面から、－1.6mまで攪乱されていた。その下層は、Ｐ－652と同様の無遺物層の灰濁色粘土層が、約0.2mの厚さで堆積していた。さらに、黄濁色砂層が0.2mの厚さで堆積していた。この層から、近世の軒丸瓦が１点出土した。

最下層の遺物包含層は、やや黒みを帯びた褐色粘土層に変質しており、調査区のほぼ中央部には、流木が検出された。これは上層の砂層が運んできたものと考えられ、人工による掘り方は検出されなかった。

包含層から出土した遺物は、弥生土器、６ｃ後半頃の須恵器片などが、若干出土したのみであった。

遺構としては、柱穴が20数穴検出された。これらのピット群も、北側のＰ－651・Ｐ－652のピット群と関連性のあるものと考えられる。

地山面は、青灰色粘質土層で、高さはＴ・Ｐ 4.416mである。




図－32　上・断面図　　下・平面図

## Ｐ－654

平成６年４月５日から調査を行った。

重機による第一次掘削を行った結果、これまでの調査区と異なり、現道路面から、－1.6mまで攪乱層のほか、その下層は、白濁色の砂層が続いていた。最下層は、調査区の北側半分までは、青灰色粘質土層が確認されたが、南側は砂層が続いていた。

この調査区では、遺物包含層、遺構、遺物は全く検出されなかった。

このことから、この辺りが東奈良遺跡の南限の可能性もあるが、さらに南側のＰ－655において確認することにした。

北半分にみられる地山面は、青灰色粘質土層で、高さはＴ・Ｐ 4.741mである。

## Ｐ－655－１

平成６年４月11日から調査を行った。

Ｐ－654の結果から、調査区の北側と南側を、現道路面から、－3.7mまで深く掘り下げたが、若干の青灰濁色粘質土層の下は、灰濁色砂層、黒色砂層（粘土混）など、砂の堆積層が続き、遺物、遺構の存在は皆無であった。

このことから、Ｐ－654の辺りが、東奈良遺跡の南限であると考えるものである。

以下、Ｐ－655－２以南の調査区については、立会調査を行うこととした。

## Ｐ－655－２

平成６年４月12日に立会調査を行う。

現道路面から、－4.0mまで掘り下げるが、遺物包含層及び遺構の検出はなかった。

## Ｐ－656

平成６年４月14日に立会調査を行った。

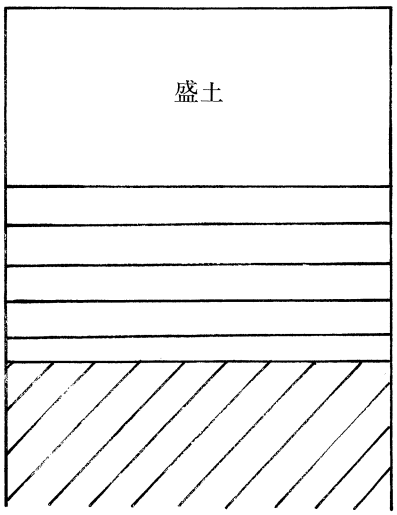
Ｐ－655－２と同様で、現道路面から、－4.0mまで掘り下げるが、遺物包含層及び遺構は存在しなかった。

## P－657

この調査区から施行業者が、国土総合建設・ヤマト工業共同企業体に変わる。

平成６年２月24日に立会調査を行った。

現道路面から、－4.0mまで掘り下げたところ、－2.1mまで盛土されており、その下層は、順に旧耕土、暗灰色粘土層、暗灰色砂層、青灰色粘土層、暗灰色粘土層、青灰色粘土層が堆積し、遺物包含層及び遺構は存在しなかった。




図―33　P―657　断面模式図

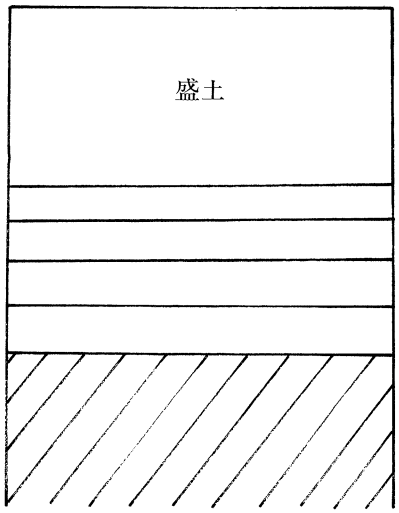
## P－658

平成６年２月25日に立会調査を行った。

現道路面から、－3.6mまで掘り下げたところ、－2.1mまで盛土されており、その下層は、順に旧耕土、暗灰色砂層（ジャリ含）、青灰色粘土層、暗灰色粘土層、青灰色粘土層が堆積している。

上層の暗灰色砂層からは湧水があり、新しい杭と板材がみられたが、これは、西側の側溝の土留め用のものと考えられる。

また下水管が、－2.6mに敷設されていた。




図―34　P―658　断面模式図

## P－659

平成６年２月26日に立会調査を行った。

現道路面から、－4.0mまで掘り下げたところ、－2.1mまで盛土されており、その下層は順に、灰色砂質土層（ジャリ含）、黄濁色砂質土層、灰色砂礫層、暗青灰色粘土層が堆積している。

## P－660

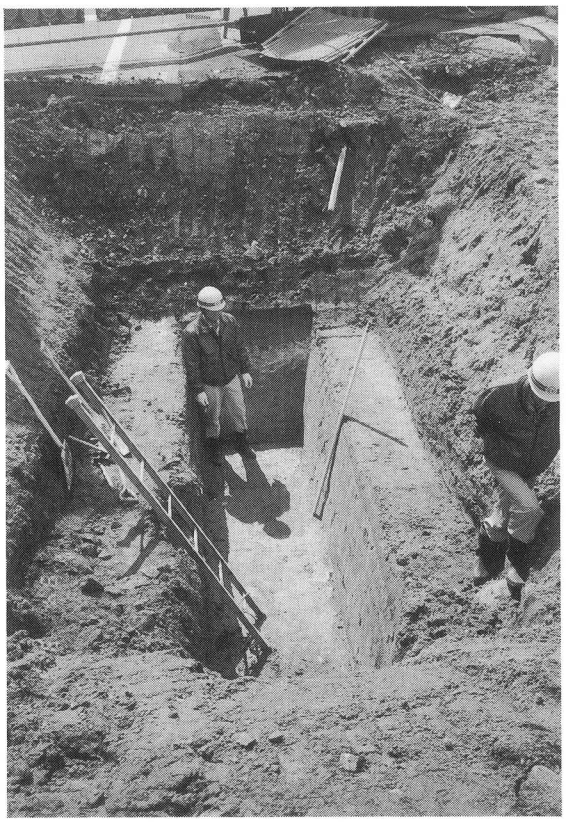
平成６年３月12日に立会調査を行った。

この調査区の、すぐ南側を小川が流れており、この川からの湧水のため、調査は不能であったが、すでに遺跡の南限を超えており、これ以上の調査はしなかった。

## P－661・2（右）

平成６年３月14日に立会調査を行った。

現道路面から、－3.0mまで掘り下げたところ、－1.7mまで盛土されており、その下層は順に、旧耕土、暗灰色砂層（ジャリ含）、黄濁色粘土層、灰濁色粘土層が堆積している。



図－35　調査区写真

平成６年度　発掘調査概報

発行日　平成７年３月30日
発　行　茨木市教育委員会
印刷所　赤　井　印　刷　㈱